「内裏躰」の系譜

—里内裏の建築様式に関する研究 (その2)—

ON THE ARCHITECTURAL GENEALOGY OF THE TEMPORARY IMPERIAL PALACES
CALLED AS “DAIRI-NO-TEI”

A study on the architectural style of the temporary Imperial Palaces Part 2

溝口 正人*

Masato MIZOGUCHI

The characteristics of the building arrangement and the architectural genealogy of the temporary imperial palaces called “dairi-no-tei” in the Heian era are analyzed in this paper.

Imperial Palace consist of two main buildings called Sisinden(front side) and Jijuden(back side). Jijuden was used as the main space in daily life for Emperor and in the ceremony for celebrating completion. But in the temporary imperial palaces except “dairi-no-tei” as well as in the aristocratic residences, only Sinden(main building) was used as main space in daily life and ceremony. This shows the difference in the concept of the building arrangement between them. And the particularity of “dairi-no-tei” in the building arrangement has been traced back to Imperial Palace.

Keywords : temporary Imperial Palace, dairi-no-tei Imperial Palace, Heian era, aristocratic residences

里内裏, 内裏躰, 大内裏, 平安時代, 貴族住宅

1. はじめに

『殿暦』天永3年(1112)5月15日条によれば、里内裏として造営される住宅の様式には「内裏躰」と「凡人家躰」(「凡人躰」)があるとする。前稿では¹⁾、安鎮法壇所となった殿舎の相違に着目し、「内裏躰」とは、寝殿以外が御在所と位置づけられる殿舎構成を示す特殊な存在であったと考えられること、そしてそのような住宅の存在は、従来、寝殿を中心として論じられてきた平安時代の貴族住宅が、必ずしも一元的な様相を示してはいなかった可能性を提示する点で注目されることを述べた。本稿では、そのような「内裏躰」は、どのような建築的特徴を持ち、平安時代を通じてどのような系譜で位置づけられてきたのかについて検討を加える。

2. 天喜度一条院と第3期高陽院

「内裏躰」と「凡人家躰」の議論がなされた白河院政期、一条院と高陽院は、たびたび里内裏の候補とされ²⁾、「累代之皇居也」³⁾と認識される存在であった。一方、前稿で明らかになったように、天喜度一条院や第3期高陽院は、寝殿以外が安鎮法壇所とされた点で内裏に類似した建築構成といえ、また第3期高陽院は「内定に造らせ給」⁴⁾形式とも記された。従来から指摘された土御門鳥丸殿に先行する「内裏躰」と位置づけられる点で重要な存在といえる。しかし両殿とも言及した史料は少なく、従来の研究でも注目されてこなかった。以下では、まず天喜度一条院と第3期高陽院の安鎮法壇所とされた殿舎について整理することとしたい⁵⁾。

2-1. 天喜度一条院

天喜度一条院は後冷泉天皇の御所として造営され、天喜4年(1056)年2月22日に移徙となった。永承3年(1048)11月2日の大内裏焼亡後、土御門京極殿を御所とした天皇は、永承6年(1051)7月19日に完成した冷泉院に移徙した。しかし天喜元年(1053)8月20日には不吉として関白頼通の高陽院へ移る⁶⁾。高陽院は翌2年正月8日に焼亡、天皇は再び冷泉院を用いたものの2月16日には四条宮第へ移る。この時には四条宮第へ橘俊綱宅の寝殿を移築して南殿としたという⁷⁾。9月20日には土御門京極殿⁸⁾へ移るが12月8日に同殿も焼亡、民部卿長家宅を経て28日には再び四条宮第へ移る。そして半年後の天喜3年6月7日より冷泉院から一条院への殿舎の移築が開始され、翌年2月22日に移徙を迎えた。以後、康平2年(1059)正月8日の焼亡まで天皇は一条院を御所とした。

このように一条院造営以前の後冷泉天皇の御所は一定しないが、天皇御所として造営されたものは、永承6年に完成した冷泉院と、その殿舎を移築した天喜度一条院である。殿舎を移築するまで冷泉院が忌避された理由は明らかではないが、冷泉院と一条院を天皇御所とする認識がみてとれる。

安鎮法壇所となった仁寿殿は、『阿婆抄』(安鎮法日記集)により東西南北に庇の存在が確認できる。西庇が大阿闍梨と有職伴僧8人の座、南庇が無職伴僧12人の座であり、東庇は承仕宿、北庇は大阿闍梨休所とされた。この座の配置を前稿でみた諸例と比較すると、承仕宿が東庇に設けられた点は異なるものの⁹⁾、保元度内裏の

* 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 助教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., Dr. Eng.

場合と同様な構成といえる。少なくとも、清涼殿の母屋を東西に横断して伴僧座が設けられた建暦度閑院の場合とは全く異なっており、この仁寿殿は東西棟の建物であった可能性が高い。

『中殿御会部類記』によれば¹⁰⁾、天喜4年閏3月27日に和歌管弦会が行われたのは中殿弘庇であった。この中殿は、前述、安鎮法壇所となった仁寿殿に相当するとみるべきであろう。同記によると、同様な和歌会において三条内裏では中殿の東簀子が公卿座、南弘庇が殿上人座とされ、第2期堀河殿では中殿（西対）の東庇が公卿座、東簀子が殿上人座とされている。これらの事例とは対照的に、公卿座が弘庇に設けられた中殿の座の配置は、大内裏の清涼殿に類似した形態といえ、庇に設けられた昼御座の前面、つまり大内裏の仁寿殿と同様、南面に弘庇が取り付く構成が想定できる。

この他、前述『阿婆縛抄』によれば、鎮宅の正鎮作法は南殿階前の庭で行われ、「南殿東脇門」、「西廻廊」の存在が記される。類例もなく大内裏と同様な複廊までは想定できないが、呼称からみて廻廊は、通常の中門廊とは異なる形態であった可能性がある。

天喜度以前の一条院の構成については太田氏、川本重雄氏、藤田勝也氏の研究があり¹¹⁾、沿革については川本氏の研究に詳しい。一条院は、東三条院詮子の御所として長徳4年(998)10月29日に新造され、以後、一条天皇の御所とされることが多くなる。寛弘6年(1009)正月5日に焼亡した後、翌寛弘7年に再建され、同8年に一条天皇はここで崩御する。長和5年(1016)には後一条天皇の御所とされたが、それに先立ち一条天皇が崩御した北対は建て替えられた。

藤田氏によれば、長徳4年度で清涼殿に充当された北対に相応する中殿（後殿とも記される）には、鬼間・上壺寝・南廂・南又廂・西又廂が存在した。また当初から里内裏として造営された寛弘7年度の場合、中殿は母屋東西7間以上で東西南北の庇・南又庇からなる構成であり、昼御座・二間・朝餉・上御局・殿上・夜御殿が存在し、長和5年の建替え後も天皇御在所として用いられているという。川本氏によれば、一条天皇の利用で西対が御在所とされた期間はきわめて短く、基本的には北対が中殿とされているという。

天喜度の場合、東西棟の建物とみられる仁寿殿（中殿）の位置は明らかではないが、従前の構成を踏襲したとみるのが自然であろう。

2-2. 第3期高陽院（康平度）

第3期高陽院は、康平3年(1060)8月11日に完成、後冷泉天皇の移徙となった¹²⁾。その後は一貫して後冷泉天皇御所として使用され、天皇は治暦4年(1068)4月19日にここで崩御した¹³⁾。以後も殿舎は存続したようで、新築の殿舎を加える修造がなされた後、延久元年(1069)6月21日に後三条天皇の移徙となった¹⁴⁾。以後も承暦4年(1080)2月6日の焼亡まで断続的に後三条天皇の御所として用いられている¹⁵⁾。この第3期高陽院の構成については、東対と釣台に言及した太田氏の研究がある¹⁶⁾。

殿舎構成に関しては、『阿婆縛抄』（安鎮法日記集）により清涼殿、南殿が確認される。「清涼殿南端」¹⁷⁾で行われたという安鎮法の舗設の詳細は不明で、清涼殿は、建暦度閑院のように南北棟の建築である可能性も否定できない。しかし延久元年に後三条天皇の移徙となった時点では、北対が御在所と明記されている¹⁸⁾。延久元年の利用形態が以前を踏襲したもので、『阿婆縛抄』に記す「清涼殿」は北対に該当する東西棟とみるべきであろう。延久元年時点の北対は、一条院と同様に先帝崩御の殿舎を撤去した後の再営である可能

性もある。後冷泉天皇崩御に際して『扶桑略記』崩御同日程に「天皇於高陽院中殿崩」とある中殿は、この清涼殿となろう。清涼殿前には殿上童舞を行った庭が存在したというから¹⁹⁾、清涼殿と南殿の間には庭が設けられるだけの空きが存在したことになる。

この第3期高陽院の完成移徙時の御帳舗設について『類聚雑要抄』巻四には以下のように言及する。清涼殿の建築規模を考えるうえで参考となる。

「高陽院御帳三基内、南殿御帳方一丈、高七尺五寸、…浜床方一丈三寸（四脚造之）、…清涼殿并夜大臣御帳方九尺、高六尺七寸、…浜床方九尺三寸、…凡今度御帳三基也、大内裏御帷〔帳か〕大略如此云々、今度御帳内、御座三帖被敷之、…」

同書によれば、一般的な御帳の大きさは方八尺であり、中宮・皇后用の場合は九尺で浜床を伴なうという²⁰⁾。高陽院の場合、南殿御帳は方一丈で四脚造の浜床を伴ない、清涼殿の昼御座と夜大殿の御帳は方九尺であった。いずれも大内裏に準じたものである。時代的には下がるが、五条東洞院殿の場合、里内裏利用時に7間四面の寝殿が清涼殿とされたが、2間の塗籠は夜大殿の舗設に支障をきたすものであった²¹⁾。また、平安時代後期の代表的な摂関家住宅といえる東三条殿や閑院では、清涼殿に用いられた東対の塗籠は桁行き1間であった²²⁾。これらの例とは対照的に、第3期高陽院の南殿と清涼殿（中殿）は、大内裏並みの御帳の舗設を可能とする規模と平面を有していたことになる²³⁾。特に清涼殿には、方九尺の夜大殿の御帳が設置可能な塗籠が存在したことになろう。

この他、東対²⁴⁾、西門・中門・陣座・宮御方²⁵⁾、月華門代・軒廊²⁶⁾、弓場殿・殿上²⁷⁾、直廬²⁸⁾、馬場殿²⁹⁾、釣台³⁰⁾といった施設、殿舎の存在が確認される。以上の施設について言及される史料をもとに殿舎の配置をみれば、南殿を中心に、西には月華門代（中門）を開き、殿上も西面に設けられていた。宮御方が南殿の東方に設けられており、先帝後朱雀の仏事が行われた東対が宮御方に相応するものであろう。直廬は北面に存在し、五節所としても用いられている。陣座は東西3間を数える。「主上渡馬場殿給」と記される馬場殿は、南殿を中心とする区画からは離れて存在したとみられ、天喜2年の焼亡以前の殿舎である可能性もある。また「釣台」の存在と「船渠」の実施が確認されるから南池が存在したことになり、従前の南池が踏襲された可能性がある。

3. 「内裏跡」の殿舎構成と成立経緯

以上、安鎮法壇所となった殿舎は、天喜度一条院では仁寿殿、第3期高陽院では清涼殿と記されるが、いずれも中殿とも記される。かつ天喜度一条院の場合、南殿の北に位置する東西棟の建築であり、第3期高陽院でも同様であった可能性が高く、両殿ともに殿舎構成上も実際の利用も天皇の御在所であったと判断される。また第3期高陽院の南殿や清涼殿は、大内裏に準じた大きさの御帳の設置が可能であり、それはけっして里内裏としては一般的ではなかった。

ただし他にも部分的には内裏に準じていた可能性はあるものの、大内裏と同じ名称の殿舎、あるいはその他の殿舎が建築的にも大内裏と同様であるかは不明である。第3期高陽院は、南池や馬場の存在が想定され、西中門が月華門代とされている点で内裏との相違が指摘できる。天喜度一条院に殿舎が移築された永承6年完成の冷泉院も、「釣台」³¹⁾が存在したから南池が想定される。むしろ両殿に

おける内裏との類似は限定的であったとみるべきで、より一層、安鎮法壇所の相違にみられる天喜度一条院の仁寿殿や第3期高陽院の清涼殿の位置づけが注目されることとなる。

実際、前稿でみたように「凡人躰」となる貴族住宅が里内裏とされる場合、寝殿が南殿に充てられ御在所が他の殿舎とされる事例でも、安鎮法壇所は寝殿に設けられている。前稿の表-1にみたように、平安時代中期においても小野宮第や藤原資平宅³²⁾の場合は寝殿に鎮具を納めている。また、源俊房の土御門殿では北対が当面の御所とされたが、それはあくまでも大饗以前の形態であり、大饗にあたっては寝殿が増築された。上述、東三条殿、枇杷殿、土御門京極殿における安鎮法壇所は管見に及ばないが、やはり貴族住宅では基本的には寝殿が主たる居住殿舎であり³³⁾、安鎮法の壇所がそのことを表象しているとみるべきであろう。

天喜度一条院の焼亡後、康平2年2月8日に後冷泉天皇は頼通の三条第(三条北堀河東)に移ったが、『百鍊抄』同日条には「遷幸左大臣三条第(以寝殿爲御在所、円融院御時例)」と記す。寝殿が御在所とされたが、それは先例を円融朝に求める特記事項であったようである。また前述した頼通の四条宮第は、後冷泉天皇の利用にあたって他から寝殿を移築して南殿に充てた。

前者の場合、御在所に充当する規模の殿舎が存在しないために南殿と中殿とを兼用した形態をとったと考えられよう³⁴⁾。後者の場合、寝殿がなかったのか、あるいは寝殿は存在したものの規模的に南殿としての使用が可能な規模ではなかったのかは不明である。しかしながら後冷泉朝の当時、一条院や高陽院とは異なり、関白頼通の邸宅とはいえ、必ずしもすべてが里内裏としての利用は想定されていなかったものであり、事例によって、里内裏としてのあるべき構成とは寝殿の移築が必要な格差が生じていたことになる。

平安時代での貴族住宅の里内裏使用の初例は、円融天皇の時代に求められる。円融天皇は貞元元年(976)5月11日の大内裏焼亡後、一旦職曹司に移り、7月26日に太政大臣兼通の堀河殿を使用した。以後、円融天皇は、天元3年(980)11月22日の大内裏焼亡後には太政官庁へ移った後、翌年7月7日に藤原頼忠の四条坊門大宮第(四条後院)を、天元5年11月17日の大内裏焼亡後には12月25日から再び堀河殿を使用した³⁵⁾。

貞元元年の堀河殿使用は内裏焼亡のわずか2か月後であるが、「御かとおはしますところ見苦しとて、ほり河殿をいみじう造りみかき給ひて、内裏のやうにつくりなして内いでくるまではおはしませんと、いそがせ給」³⁶⁾と記される。天元4年の四条坊門大宮第の使用は大内裏焼亡の7か月後であるから、この場合も相応の作事が行われた可能性がある。なおかつ、再建後の内裏に天皇は戻っていることから、これらの利用もあくまでも内裏完成までの限定的な利用とみなされる点には留意する必要がある。

前述、頼通の三条第を利用するにあたって寝殿を御在所とする先例となった円融天皇の里内裏の例が、堀河殿であるか四条坊門大宮第であるかは明らかではない。しかし堀河殿は修造により「今内裏」と呼ばれたのであり³⁷⁾、逆に堀河殿や頼通の三条第は、当時の理解として、造営当初から天皇の利用を想定した規模や構成、建築様式を有するものではなかったことになる。

藤原兼家の東三条殿について、『大鏡』巻五に「東三条殿の西対を清涼殿つくりて御しつらひよりはしめてすませ給ふなとをそ、あ

まりなる事に人申しめりし」と記すことはよく知られている。兼家が一条天皇の摂政に就任した後、永延元年(987)7月21日に新造移徙となった東三条殿を形容したものと考えられるが³⁸⁾、当時、天皇御在所となるような規模の東西対の存在は、必ずしも一般的ではなかったと同時に、そのような構成が、摂関家とはいえ「凡人」に相応する貴族の住宅では憚られるという意識が存在したことがわかる。

一方、藤田氏によれば³⁹⁾、平安時代中期に里内裏として北対が御在所とされた事例は、一条院の他にも道長の東三条殿や枇杷殿、長元6年造営の土御門京極殿(上東門院御所)が確認され、これらの北対には、建築規模・平面構成上も内裏の清涼殿や仁寿殿に類似するものがあるという。このような事例から、藤田氏は御在所たり得る規模と形式を、該当する北対が持っていたとみる。

しかし大内裏においても、天慶年間に綾綺殿が天皇御在所とされた際には昼御座の前面となる西面に孫庇が追加された⁴⁰⁾。道長の時代、天皇御在所が北対に設けられた枇杷殿の場合も、天皇御所とするにあたって「九重作様頗写得」⁴¹⁾と記される造作がなされており、北対が、御在所たり得る規模と平面構成を当初から備えていたかには議論が生じよう。

紫宸殿と仁寿殿あるいは清涼殿という、複数殿舎の組み合わせで天皇の御在所が構成される内裏の形態には、安鎮法壇所で示される特殊性をみるべきであり、一方で当初から天皇御所として造営されたものの中には、天喜度一条院や第3期高陽院のように、同様な特殊性を備えたものも存在した。このような形態は一般貴族住宅とは異なるものとして認識され、許容されていたのであり、同様な存在として「内裏躰」となる事例は位置づけられることとなろう。そして天喜度一条院は冷泉院を移築したものであったから、永承6年完成の冷泉院も同様な構成であった可能性がある。

橋本義彦氏によれば⁴²⁾、嵯峨天皇による弘仁7年(816)以前の造営に由来する冷泉院は、朱雀院とともに天皇累代の「わたしもの」としての後院であり、位置づけにおいて一般貴族住宅とは異なるという。一方、前述した円融朝において、堀河殿は「後院」とするために「公家」が造営したものと記され⁴³⁾、天元4年の四条坊門大宮第の利用では「後院」とされたことが特記される⁴⁴⁾。少なくとも円融朝の事例は、臣下の貴族住宅が「後院」とされた、きわめて特殊な事例であったようである。寛弘度一条院が「みかどの後院におぼしめすなるへし」と記されている点には⁴⁵⁾、同様な認識を読みとることができる。

このように円融朝に至って、貴族住宅が里内裏として使用されるようになるものの、御在所となる中殿(仁寿殿もしくは清涼殿に充当)と南殿からなる「内裏躰」に相当する構成は、必ずしも一般的ではなかったとみられ、それらが後院との関係で系譜づけられる可能性がある。「内裏躰」との関係において、当初から天皇の利用を想定した後院の構成が注目されることになる。

4. 後院から「内裏躰」へ

天皇累代の「わたしもの」としての後院の建築構成の実態解明は、史料的な限界から必ずしも十分ではない。また従来は寝殿造の系譜の上で論じられており、貴族住宅と相違する後院の特殊性については、ほとんど言及されてはこなかった。以下では、まず南・北大殿からなる大内裏の構成について整理し、平安時代初期から中期にか

けての後院について、内裏との関係から位置づけることとしたい。

4-1. 大内裏における南大殿と北大殿

大内裏において、紫宸殿は南殿、南大殿、前殿とよばれ、仁寿殿は中殿、北大殿、寝殿とよばれた⁴⁶⁾〔図-1〕。どちらも大殿(オホトノ)とよばれているが、その機能は大きく異なる。紫宸殿は聴政にともない出御する天皇の執務空間である。一方、仁寿殿は寝所が設けられた居住空間であり御在所であった⁴⁷⁾。このように大内裏は、前殿・寝殿の南北2つの大殿の構成で特徴づけられる。

安鎮法壇所となるばかりでなく、移徙時や大嘗祭、新嘗祭の後に邪気を払うための大殿祭の場とされたのも仁寿殿であり、御在所の

図-1 大内裏における南北大殿の構成

図-2 平安宮紫宸殿復元平面図
(平安時代後期、鈴木亘『平安宮内裏の研究』による)

図-3 平安宮仁寿殿復元平面図(鈴木亘『平安宮内裏の研究』による)

移動とともに大殿祭の場も清涼殿に代わる。大殿祭での紫宸殿の位置づけは、大殿という呼称に相違して重要ではないという⁴⁸⁾。禁忌に関わる天皇のすまいとして内裏をみた場合、寝所のある仁寿殿の位置づけは、紫宸殿より重要なものといえる。

建築的にも両殿は大きく異なる。紫宸殿が母屋に間仕切壁のない開放的な構成であるのに対して〔図-2〕、仁寿殿は寝所としての塗籠を伴う構成であり〔図-3〕、それはまたこの殿舎が居住を目的としたことを示す。清涼殿が御在所として定着するのは宇多朝以後とされるが⁴⁹⁾、塗籠が存在する点、建具の有無では相違するが昼御座側の孫庇(弘庇)が存在する点で、清涼殿の平面構成は、棟の向きは異なるものの仁寿殿に通ずるものである。清涼殿の東孫庇の成立は遅くとも9世紀末であるが⁵⁰⁾、清涼殿が御在所として定着する過程で、仁寿殿の平面構成が受容されたものと考えらるべきであろう⁵¹⁾。

大内裏の仁寿殿にみられる平面構成は「内裏軀」に相当する建暦度閑院⁵²⁾や富小路内裏⁵³⁾に、規模的な省略がありながらも踏襲されている。建暦度閑院内裏の場合、安鎮法壇所は清涼殿に設けられており、中宮御所として利用された仁寿殿代は⁵⁴⁾、御在所とはかけ離れた形骸化した存在と理解できる。しかし仁寿殿代が設定された背景には、象徴的な御在所として仁寿殿の存在の伝統を認めざるを得ないだろう。

このような前殿(南大殿)と寝殿(北大殿)からなる南北2殿の構成は、平城宮では一貫して認めることができるから⁵⁵⁾、内裏においては奈良時代にまでさかのぼる構成といえる。平城宮の場合、南北大殿に相当する建築の規模や構成は、必ずしも平安宮と一致するわけではない⁵⁶⁾。また庇の四隅を欠く構成という点で平安宮と類似する紫宸殿相当建物が確認される長岡宮では⁵⁷⁾、仁寿殿相当建物が未発見であり、御在所の建築的実態は明らかではない。

しかし平安遷都に先立つ延暦12年(793)に桓武天皇が遷御した東院と考えられる長岡京左京北一条三坊二・三町の遺構では、平安

図-4 長岡京左京東院跡遺構図

宮内裏と同様に、南・北大殿に相当する建築が確認されている⁵⁸⁾。この東院の場合、紫宸殿と仁寿殿に相応する建物は、各々平安宮内裏ときわめて類似した平面構成とみなされ〔図-4〕、柱径に関しては、仁寿殿に相当するSB436001の方がより太い。内裏における南北大殿の2殿構成は、平安京以前からの系譜に基づくものと判断でき、かつ平安時代の後院と同様な東院の性格を考えると、行宮など内裏以外の天皇御所の中にも同様な建築構成を示す事例が存在した可能性がある。

4-2. 後院の殿舎構成

平安時代前半における累代の後院としては、冷然院（冷泉院）⁵⁹⁾と朱雀院があげられる。両院の建築構成については、すでに太田氏の研究があり⁶⁰⁾、機能的な変遷については所京子氏の詳細な研究がある⁶¹⁾。所氏によれば、当初は天皇の離宮的性格をもっていた後院は、次第に譲位後の御所にも使用されるようになったという。

冷然院は、『大鏡』巻二に「方四丁にて四面に大路ある京中の家は、冷泉院のみとこそ思候つれ」と記される存在であった。嵯峨天皇の離宮として弘仁7年（816）頃造営されたもので、文徳天皇以後、天皇の里内裏としても利用された。文献史料をもとに太田氏により南池の存在が指摘されているが、平安時代の汀線や景石の遺構も確認されている⁶²⁾。冷然院の変遷について詳しい鈴木亘氏の研究により⁶³⁾、殿舎構成を確認しておこう。

鈴木氏によれば、嵯峨上皇御所の時代には前殿が正殿であり、御在所的な殿舎として寝殿が存在したという。文徳天皇御所とされるにあたって造営された「新成殿」を、同氏は西対に対応する殿舎とみるが位置は明確ではない。少なくとも内裏を行なっているから⁶⁴⁾、位置づけとしては大内裏の仁寿殿に相応する殿舎である。その他に別納所や厩町など諸施設が存在し、貞観17年（875）正月の焼亡にあたって屋舎54棟を数えたという。後に陽成天皇により再建されるが再び焼亡し、村上天皇により天徳3年（959）頃に再建される。冷泉院と呼称を変えるこの天徳再建以後、南殿の北には御在所とされる中殿が存在した。天喜度一条院に移築された永承度冷泉院は、この天徳再建に続くものである。

太田氏も指摘するように、天徳再建の冷泉院の場合、東南対・西南対が確認される。この呼称が南殿からみたものであれば、両殿は大内裏における校書殿や宣陽殿に相当する位置となり、他の貴族住宅とは異なった配置となる。また中殿からみたものであれば、両殿は綾綺殿と清涼殿に相当する殿舎となり、御在所としての中殿の位置づけの高さを示すものとなる。いずれにせよ規模的に同一であったかは不明であるものの⁶⁵⁾、南北2殿の構成は、冷然院（冷泉院）において一貫して踏襲されたことになる。

このような構成は冷泉院のみではない。鈴木氏によれば⁶⁶⁾、文徳天皇や清和天皇の御所ともされた大内裏の東宮は、南庭東西に細殿を配し、前殿と御在所となる北殿から構成されており、前殿が紫宸殿に近い性格であるという。前殿は寝殿とも称されたようであるが、二つの殿舎から構成される点に冷泉院との類似が認められる。

一方、太田氏によれば、朱雀院では寝殿、東西対、東2対、宣陽殿、仁寿殿、柏梁殿などの殿舎の存在が確認される。これらの位置関係は必ずしも明確ではないが、朱雀院の正殿は寝殿と称されたという。朱雀院の場合からみて、天皇の利用する邸宅でも、前殿＝正殿＝寝殿といった構成も存在した可能性がある。安鎮法壇所が貴族

住宅や院御所において常に寝殿に設けられたことを考えると、むしろこの構成の方が一般的であったとみることもできる。

南北に並ぶ二つの殿舎のうち前殿の方が規模的に大きい事例は、平城京や長岡京で確認できるから⁶⁷⁾、前殿が卓越する構成は、必ずしも後発ではない。しかし少なくとも公私の空間分化ともみなされる南・北大殿からなる平安宮大内裏の構成は、そのような空間構造を必要とした天皇御所に特殊な構成とみることができる。直接的には、古代において参照すべき中国の宮殿形式との関係が想定できるのであろう⁶⁸⁾。

寝殿・東西の対・中門廊を基本とした一般貴族住宅と、後院との建築様式の相違は明確ではない。後院における前殿と中殿（後殿）との建築規模や形態が、どのように相違していたのかも不明である。しかし以上の考察で指摘できる、貴族住宅と内裏との相違を考えると、後院の構成も寝殿を中心とする従来の寝殿造のイメージとは異なったものが想定される⁶⁹⁾。その場合、長岡京東院遺構が示す建築的な実態は、内裏との類似からきわめて示唆に富む⁷⁰⁾。

4-3. 「内裏跡」の成立

以上のように、平安時代中期の貴族住宅では、南北2殿の構成をとっていたとは考えにくく、天喜度一条院や第3期高陽院にみた構成は、後院としての構成が受け継がれた結果とみることができる。第3期高陽院は、11世紀半ばまで後院でこのような構成が保持されたことを示しており、「内裏跡」に相応する事例に限れば、安鎮法壇所も御在所の実態を反映したものであったことになる。

よって建築の規模や構成の観点からみれば、藤田氏が指摘した枇杷殿や土御門京極殿における御在所としての北対の存在は、それまで天皇御所独自のものとして大内裏や後院にみられた構成が、里内裏としての使用を契機として、その他の貴族住宅にまで及びつつあった当時の状況を示していると理解すべきようである。

また、安鎮法壇所が寝殿以外となる最後の事例が第3期高陽院である点は、後院における内裏形式の踏襲といった点でも注目される。第3期高陽院が造営された当時、少なくとも大内裏における日常の御在所は清涼殿に定着していたとみてよい。よって後院にみる南北2殿の構成は、同時代的な内裏の構成を反映したものというよりは、内裏を起源としつつも、後院独自の系譜を示したものとだろう。つまり後院に位置づけられる邸宅が造営されていくなかで、それに合わせた建築様式が成立した。「内裏跡」の成立過程の実態は、そのように理解できるのである。

一方、「内裏跡」に相応する後院とは異なり、一般貴族住宅は、正殿＝御在所＝寝殿となる一つの殿舎を中心とする構成が基本であった。しかし摂関期や院政期における幼帝即位や外戚庇護、たび重なる内裏焼亡などによる頻繁な里内裏利用の必要性は、「内裏跡」以外の貴族住宅を天皇の居所とする事態を生んだ。その場合、頼通の三条第のように寝殿を御在所としたり、兼通の堀河殿のように西対を「内裏のやうにつくりなし」たりする里内裏としての多様な対応が必要となる。その結果「凡人跡」にみられたような、部分的に内裏に準じた構成を生んだと考えられよう⁷¹⁾。前稿で示したとおり、『作庭記』にみる南庭の規定や、『殿暦』にみた「内裏跡」、「凡人跡」の議論、近代では「本本作皇居之家」は久しくみないという『中右記』の記述は、そのような経緯を背景としていたとみれば、きわめて理解が容易となる。

以後確認される範囲の「内裏」に相当する事例では、南北棟の清涼殿が安鎮法壇所となった。この変化は、御在所が清涼殿に定着した大内裏の実態が反映された結果であり、さまざまな禁忌の基点となる御在所としての清涼殿の位置づけの定着を示すものとみることができる⁷²⁾。よって「内裏」が議論された天永3年(1112)時点での貴族たちの意識に、後院にみる南北2殿の構成が、どこまで把握されていたかはわからない。しかし後院を起源とする「内裏」に相応する、直近の事例である天喜度一条院や第3期高陽院の系譜の延長上に、内裏の構成を模(かたど)った永久5年(1117)の土御門鳥丸殿の造営があり得たと理解できるのではなかろうか。

5. 里内裏における建築様式の受容

安鎮法壇の行われた殿舎の分析によれば、大内裏と一般貴族住宅との建築様式の相違点の側面として、両者の安鎮法壇所の相違はとらえることができる。そしてそれが里内裏における「内裏」和「凡人」の相違の重要な部分を占めていたとみられる。以下では里内裏における内裏の建築様式の受容という観点から、前稿を踏まえて以上の考察をまとめることとしたい。

5-1. 大内裏と後院の特質

安鎮法壇の行われた殿舎の相違は、御在所として認識される殿舎の相違である。紫宸殿と仁寿殿の存在は、殿舎構成での大内裏の特殊性を示す。形態、機能ともに異なる「南大殿」の紫宸殿と「北大殿」の仁寿殿が存在する内裏の構成は、他の貴族住宅とは大きく相違したものであった。このような構成は、御在所でありかつ政庁であるという内裏の両面性を示すものと考えられる。そして後院も同様な構成であり、「内裏」もその系譜に位置づけられる。逆に一般貴族住宅の寝殿は、南北大殿を包括する殿舎とみなすこともできる。また安鎮法壇所の変化に、仁寿殿から清涼殿へという内裏の御在所の変化の反映をみることができる。

ただし一条院や第3期高陽院は、建築構成の細部に至るまで内裏に準じた永久度、あるいは保延度土御門鳥丸殿の構成と同様であったかは疑問であろう。土御門鳥丸殿の出現以前では、あくまでも天皇御所の本所である大内裏の存在が前提であり、里内裏は臨時的な存在と認識される以上、後院、あるいは「内裏」の特質は、むしろ前殿と寝殿からなる2殿構成に集約されていたのではなかろうか。

5-2. 貴族住宅の変様

寝所としての塗籠を伴う一般貴族住宅の寝殿は、安鎮法壇所に象徴されるように居住を基本とした殿舎である。この点では大内裏における仁寿殿に相当する殿舎であるといえる。一方で摂関政治の進展に伴う儀礼整備のなか⁷³⁾、寝殿は大臣大饗などに対応した儀式空間ともなった。源俊房の土御門殿で大饗に合わせて寝殿が造営された事実が、紫宸殿にみられる儀式空間としての側面をも内包した寝殿の位置づけを示唆している。よって寝殿を中心に東西対や中門廊を伴う「如法一町家」の構成は、あくまでも貴族住宅における「如法」の構成だったと理解すべきだろう。

一方、円融朝を初例として以後、洛中の貴族住宅、つまり「里亭」が「皇居」として使用されるに及んで、寝殿の位置づけも変化していったと考えられよう。内裏の空間を再現するにあたっては、寝殿が南殿、北対あるいは東西対のいずれかが中殿とされる。その場合、まず御在所となる対は、機能を満たすべく拡充ははかられた。平安

時代中期における御在所としての北対の存在は、そのような変化のひとつとみられよう。続いて指摘できる東西対の拡充は、摂関家の儀式空間となったことによると指摘されているが⁷⁴⁾、一方では内裏の構成を反映したものとも理解できる⁷⁵⁾。清涼殿と同様な平面構成が貴族住宅や院御所の対に認められる点は⁷⁶⁾、その証左となろう。

やがて11世紀後半造営の第1期堀河殿や仁安2年(1167)造営の閑院[図-5]のように⁷⁷⁾、塗籠が存在しない寝殿もあらわれるようになった。寝所としての塗籠の消失は、それまでの仁寿殿的存在から紫宸殿的存在へという、寝殿の空間的特質の大きな変様を示したものと理解できる⁷⁸⁾。このような内裏の構成の受容を経て、平安時代中期以降、鎌倉時代にかけての貴族住宅は、空間的には大きく変様を遂げていったとみなければならない。

図-5 閑院 寝殿平面図(『玉葉』治承4年2月21日条所収)

6. おわりに—内裏の終焉—

「内裏」にみる内裏空間の再現は、一方で大内裏の存在を形骸化させる。後院における南北大殿の構成の受容は、その端緒といえよう。しかし決定的であったとみられるのは、やはり先学に論じられているように、幼帝鳥羽天皇の出現により、大内裏が存在するにもかかわらず造営された土御門鳥丸殿の存在であろう。土御門鳥丸殿は、細部にいたるまで内裏を模(かたど)ることを目論んだ。ところが内裏は本来、大内裏以外に存在しないから、「内裏」により内裏をかたどる行為は、内裏の無実化に他ならない。土御門鳥丸殿の造営は、そのような自己矛盾をはらんでいたのである。

土御門鳥丸殿において実現した縮小と省略による内裏空間は、あくまでも便宜的なものである。しかも鳥羽・崇徳の両天皇は、寝所としての夜大殿を放棄した⁷⁹⁾。土御門鳥丸殿において実現した内裏空間は、故実化し無実化した内裏だったのである。そしてこのような生活の実態と故実との遊離は、内裏に限定されたものではない。貴族住宅においても寝殿・東西対からなる「如法一町家」の構成は変様し、常御所が独立して寝殿は寝所としての存在を失った⁸⁰⁾。

大内裏が存在している間は、その様式をかたどることも可能である。しかし大内裏は承久元年(1219)に焼亡し、以後再建は試みられたが完成しないまま嘉禄3年に焼亡し廃絶する⁸¹⁾。「内裏」和位置づけられる建暦度の閑院は建長元年に焼亡するものの、同様な様式で2年後には再建された。しかし再建された建長度の閑院も正元元年(1259)に焼亡し、以後、閑院に準じた二条富小路殿が完成する文保

元年(1317)までの57年間は、「内裏鉢」に相当する建築さえも存在しなくなっている。

二条富小路殿の造営にあたって、参照すべく建長度閑院の記憶を求めた玄輝門院は当時72才であったという⁸²⁾。内裏たるべき御所として造営された二条富小路殿は、建長度閑院のわずかな記憶と資料から「内裏鉢」をかたどって造営されたのであり⁸³⁾、二条富小路殿では、南北大殿の構成は、きわめて形骸化したものであった。殿舎構成にみられた古代以来の内裏の系譜は、この段階で終焉を迎えたといえる。「内裏鉢」に確認される内裏の構成の受容は、そのような終焉への端緒であったと位置づけられよう。

注記 引用史料中の()括弧内は割註を、[]括弧内カタカナは史料校訂、ひらがなは筆者註を示す。特記のない史料は、群書類従、史料大成により、『阿婆抄』は大日本仏教全書による。

- 1) 拙稿「鎮宅儀礼からみた里内裏の殿舎構成—里内裏の建築様式に関する研究(その1)—」日本建築学会計画系論文集504号、1998.2。住宅の呼称は前稿に準ずる。
- 2) 例えば『中右記』天仁2年(1109)6月5日条参照
- 3) 『中右記』天永3年5月15日条。「内裏鉢」と「凡人家鉢」に言及する「殿暦」と同日の記事である。
- 4) 『栄花物語』巻36
- 5) 以下、歴代の里内裏については、詫間直樹編『皇居行幸年表』続群書類従完成会1997、および京都市編『京都の歴史』第10巻、1976。巻末「皇居年表」(瀧浪貞子『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版1991に再録)を参照。詫間氏の年表は詳細を極めており、参照するところが大きい。
- 6) 『扶桑略記』同日条「天皇自冷泉院遷幸関白左大臣賀陽院、御薬之間、冷泉院不吉故也」
- 7) 『百鍊抄』天喜2年2月16日条「自冷泉院遷御四條宮(左大臣第、運渡俊綱宅寝殿為南殿)」。橘俊綱は関白頼通息で『作庭記』の作者と目されている。
- 8) 『扶桑略記』同日条に上東門院とある。
- 9) 『阿婆抄』(安鎮法日記集)によれば、延久3年(1071)の場合、所収指図では「承仕座」が東に設けられている。大内裏の場合では承仕宿の位置が東西どちらに設けられるかが定まっていなかったようである。
- 10) 『中殿御会部類記』(群書類従所収)[大右記]による。三条内裏については前稿註26)参照。
- 11) 太田氏前掲書第三章第三節、川本重雄「一条院東二対再論」日本建築学会北海道支部研究報告集58号、1985.3、藤田勝也「北対考」日本建築学会計画系論文集408号、1990.2(『古代中世住宅史論』2002所収)を参照。
- 12) 『康平記』同日条
- 13) 『本朝世紀』同日条
- 14) 『百鍊抄』延久元年6月21日条「自大宮院遷御高陽院、件院者帝旧居也、今加造舎屋有遷幸也」
- 15) 詫間直樹編『皇居行幸年表』続群書類従完成会1997を参照。
- 16) 太田氏前掲書第四章第七節。ただし『扶桑略記』の記事をもとに断片的に考察しているにとどまっている。
- 17) 同書(林泉房御本「康平三年鎮日記」)に「於清冷殿南端安鎮御修法」とある。
- 18) 『土右記』延久元年6月21日条に「件院北対為御在所、殿上在西方」とある。藤田氏前掲論文参照。この記述によれば、北対が御在所とされる事例は、当時すでに一般的ではなかったとも理解できる。
- 19) 『百鍊抄』治暦3年10月22日条「於清涼殿庭有殿上童舞数曲」
- 20) 同書巻四には八尺御帳の図をあげ「但后宫御料、立浜床時者(用九尺帳也、浜床ヲバ帳台謂之)、浜床高九寸」とする。
- 21) 『山槐記』治承4年2月21日条。拙稿「六条殿寝殿と五条東洞院殿西面殿舎の殿舎規模について—柱間寸法からみた院政期貴族住宅の殿舎規模に関する研究(その1)—」建築史学第22号、1994.3を参照
- 22) 東三条殿東対については、拙稿「後鳥羽上皇御所二条殿と高陽院の対代について」日本建築学会計画系論文集第458号、1994.4、閑院東対については太田氏前掲書第五章第二節参照。

23) 東三条殿と閑院の東対における塾簾の狭小さは、両殿の規模的な狭さを示すとみるよりは、常御所の独立など、時代的な相違による居住空間の変容による可能性が考えられる。ただし里内裏としての舗設に対応した形態ではなかったことは指摘できる。

24) 『扶桑略記』治暦元年9月25日条「公家奉為先帝、於宸居東対、設四日八座法会」

25) 西門・中門・陣座・宮御方については『康平記』(定家卿記)康平5年6月5日条「申刻内府殿下初著本陣給、先入西門、経階下御坐宮御方、次著本陣(件陣三間也、一間敷大将御座、…東二間敷次将座、緑端疊、即著御次将南座)…次有請印…将監武行奉仕之(於中門西掖小板敷爲之)」(師夷4月22日任左大将後の着陣に関する記事)。なお宮とは皇后宮寛子であろう。

26) 月華門代・軒廊については『水左記』治暦元年(1065)6月3日条(宣命)「[着陣]次開門、…公卿参入列立、[右大井は]立軒廊第二間面、…公卿再拜、…次参皇后宮再拜、中宮如此、還経南殿前、自月華・[門力]代陣、與公卿相率退出」。註22)『康平記』にある中門と月華門代は同一の可能性がある。

27) 弓場殿・殿上については『水左記』治暦元年2月22日条「午初参内、中宮権大夫候殿上、頃之立座、於弓場殿令奏宣命、未返給之間、昇於小板敷居殿上、返給宣命、召使於小板敷給宣命之後、内記撤筥」。なお殿上については『土右記』延久元年6月21日条「後三条天皇移徙」に「入自高陽院西門(無反問)、下御南殿、右府以下着右近陣、(西中門南)、…件院北対為御在所、殿上在西方」とある。

28) 『康平記』康平3年8月11日条「初内府殿五節所社束(北面殿御直廬)」、同4年12月20日条(頼通任太政大臣)には「未刻殿下令参給(自左衛門陣令参給)、即御坐御直廬、…左大臣已下被率参御直廬、即以引率参弓場殿」とあり頼通の直廬とみられる。

29) 『水左記』治暦2年3月12日条「今日主上渡馬場殿給御覧花、還御之後、公卿殿上人等参皇后宮御方、有孟酌絲竹事」。なお『百鍊抄』康平5年5月22日条に「天皇於高陽院覽競馬騎射」とある。競馬・騎射も行われている。

30) 『扶桑略記』治暦2年10月16日条「主上出御釣台、有船家」

31) 『百鍊抄』永承7年10月19日条「於冷泉院釣臺宴遊、」

32) 『春記』長久元年(1040)12月10日条。小野宮第北隣(大炊御門殿大路北烏丸小路西)であろうか。吉田早苗「藤原実資と小野宮第」日本歴史350号、1977.7を参照。

33) 前掲吉田氏論文も同様な見解をとる。

34) 里内裏時の殿舎の利用形態については、太田氏前掲書第七章第一節に詳しい。紫宸殿と清涼殿に対する殿舎充当の原則については、前掲拙稿「西六条殿寝殿と五条東洞院西面殿舎の殿舎規模について」を参照。

35) 註5)両書による。

36) 『栄花物語』巻二、花山たづぬる中納言。

37) 『栄花物語』巻二、花山たづぬる中納言。

38) 東三条殿の沿革については、太田氏前掲書第三章第十節を参照。

39) 前掲藤田氏論文参照。なお、里内裏において北対が御在所とされた事例については、既に飯淵康一「空間秩序からみた平安朝貴族住宅の研究」(私家版)1985、第4章第2節、に指摘がある。

40) 『大内裏図考證』第16、綾綺殿の項を参照。福田敏明「平安内裏の綾綺殿について」日本建築学会大会学術講演梗概集1980.においても、朱雀天皇(在位930~946)の御所とされた綾綺殿には、該当時代(938~946)に西孫底が確認できる点を指摘する。

41) 『御堂関白記』寛弘6年(1009)10月19日条

42) 橋本義彦「後院について」(『平安貴族社会の研究』吉川弘文館1976,pp151~171)参照。目崎徳衛氏は「政治上上の嵯峨上皇」(『貴族社会と古典文化』吉川弘文館1995所収)において、後院が朱雀天皇以前は所領や財産の管理機関としての呼称であり、冷泉院や朱雀院といった施設とは別のものである点を明かにされた。本論での後院は施設の名称として便宜的に用いる。

43) 『日本略記』天元5年12月25日条「天皇自職曹司遷幸堀川院、件院為後院、公家被造之」。公家とは兼通を示すものと考えられる。なお詫間前掲書ではこの時の修造をみとめるが、貞元元年時点の造営をもとに、天元5年の利用に際し、堀川院の位置づけを記したとの解釈も成り立つ。

44) 『日本略記』天元4年7月7日条「天皇遷御四条後院、太政大臣四条坊門大宮第也、以之為後院」。なお9月13日条にも「天皇從後院遷御職曹司」と記されている。

- 45) 『栄華物語』巻四、みはてぬ夢
- 46) 鈴木亘『平安宮内裏の研究』中央公論美術出版 1990 第三編第三章、橋本義則・山岸常人「『平安宮内裏の研究』を読む」建築史学 17 号、1991.9、を参照。南大殿と北大殿については、北大殿を常寧殿に充てる鈴木氏前掲書の解釈には疑問があり、それぞれ紫宸殿と仁寿殿に充てる橋本・山岸氏の解釈（鈴木氏論文初出時も同様な見解をとる）が妥当である。
- 47) 古瀬奈津子「宮の構造と政務運営法」史学雑誌 93-7、1984.7、および鈴木氏前掲書による。
- 48) 石川千恵子「古代大猷殿考」日本歴史 505 号、1990.6
- 49) 目崎氏前掲書「仁寿殿と清涼殿」による。
- 50) 飯淵康一・水野浩伸「『大内裏図考証』にみる清涼殿及び後宮の孫庇の成立について」日本建築学会東北支部研究報告 1990.6。
- 51) 長岡宮の状況が不明であるが、後述する長岡京東院の遺構では仁寿殿相当建物に孫庇が存在せず、前述綾綺殿では、御在所とされた時に孫庇が付加された。清涼殿の孫庇も平安時代のある時期に付加された可能性が高い。
- 52) 太田氏前掲書第七章第二節。南面の規模が明らかとなる。鈴木氏前掲書第 3 編第 3 章第 5 節でも言及する。建長度については規模・平面ともに不明である。
- 53) 川上貢『日本中世住宅の研究』墨水書房 1967、第 1 編第 6 章
- 54) 太田氏前掲書第七章第二節参照
- 55) 橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房 1995、第 1 章。および奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告 XIII」、奈良国立文化財研究所学報第 50 冊、1991.3 参照。
- 56) 「平城宮発掘調査報告 XIII」によれば、平安宮の紫宸殿と仁寿殿のように南北 2 殿が母屋梁間 3 間におよぶ建築構成は、創建期となる元明・元正朝に充当される第 1 期の遺構のみである。
- 57) 京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概報 昭和 44 年度』、1970
- 58) 堀内明博編『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』古代学協会・古代学研究所、2002.3、参照。
- 59) 村上天皇の再建にあたって冷然院から冷泉院に改められた。本論でも適宜使い分ける。
- 60) 冷泉院については、太田氏前掲書第 2 章第 3 節、朱雀院については同第 4 節を参照
- 61) 所京子「平安前期の冷然院と朱雀院」史窓 28 号、1970
- 62) 「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 史跡旧二条離宮(二条城)」(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003.2 を参照。
- 63) 鈴木氏前掲書、第 4 編第 5 章第 2 節
- 64) 『文徳実録』斉衡 2 年(855)正月壬寅「帝御新成殿、内裏」
- 65) 註 62) 概報によれば、汀線や景石の遺構は、平安時代前期および中期から後期の 2 期確認されており、庭園の形状の変化がある。このような変化に対応して建築も変化した可能性がある。
- 66) 鈴木氏前掲書、第 2 編第 5 章第 3 節。なお『延喜式』12 月晦日神祇官神麻の項にあげた中殿・北殿について、鈴木氏は北殿を御在所として中殿をその北とし、目崎氏前掲書 p25 では中殿を北殿の南とする。いずれにしても前殿・後寝の構成であることには変わりがない。
- 67) 平城上皇の「平城西宮」に相当する平城宮第 1 次大極殿地区第Ⅲ-1 期の遺構では、中心殿舎として SB6620 と SB7170 が南北に並立するが、前殿に相応する SB6620 の規模が大きい(奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告 XI」、奈良国立文化財研究所学報第 40 冊、1981)。また南に八脚門を開く長岡京左京 2 条 2 坊 10 町の遺構は、性格が明確ではないものの梁間 3 間×桁行 7 間の正殿が規模的には他の殿舎から隔絶している(山中章「京都府向日市長岡京東院跡」日本考古学年報 44、1993.7)。
- 68) 前殿に関する中国の建築的な系譜については、鈴木氏前掲書第 2 編第 6 章第 1 節を参照。中国における宮殿の構成については、吉田敏「日中宮城の比較研究」吉川弘文館 2002.2、第 1 部参照。吉田氏によれば、漢代に前殿-後殿の構成が確認され、北周以後、三朝制が導入されるというから、直接的な一致を認めるならば、前殿-後殿の構成は、漢代まで遡ることとなる。ただし『少納言入道信西[藤原通憲]王宮正堂正寝勘文(『石清水文書 四』所収)により、久安 4 年(1148)時点での中国の建築構成の理解が、語彙的なレベルに留まっていたことがわかる。よって殿舎名称の一致は建築構成の一致に結びつくものではなく、日本の独自性を認める余地がある。
- 69) 「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-12 史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷泉院跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002.10、によれば、冷泉院西北隅に相当する A 区からは、平城宮 6664 式の軒平瓦(長岡宮からの搬入瓦か)、平安時代前期初頭の軒丸瓦、平安宮大極殿や豊樂殿出土と同様な平安時代前期の軒平瓦が少量ながら出土している。冷泉院の建築が瓦葺きである可能性も否定はできない。
- 70) 瀧浪貞子「長岡京と桓武天皇-とくに内裏移転説を中心に-」(前掲「長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区」、第 V 章)では、東院の建物が冷泉院に移築された可能性を推測する。前掲冷泉院跡出土瓦に搬入瓦がある点は、この推論の蓋然性を示すものかもしれない。
- 71) 藤田氏前掲論文で指摘される長元度土御門京極殿(上東門院御所)における北対の石灰壇の存在は、この事例として理解可能である。
- 72) 前稿、註 17、18 を参照。
- 73) この動向については、山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版 1988 を参照。
- 74) 川本重雄「対屋考」日本建築学会計画系論文報告集第 384 号、1988.2
- 75) 前掲論文で川本氏は、主に摂関家を中心とした貴族住宅における儀式の変化により儀式の場が寝殿から東西対へと移り、それが東西対の拡充をもたらしたとする。現象把握として首肯できるが、寝殿での大饗から対の南面での臨時客へという儀式の変化が、どうして生じたかが問題となる。同様な儀式の場の変化は、朝賀から小朝拝へという紫宸殿から清涼殿への変化として、先行して大内裏にみられる。摂関家を中心とする貴族住宅の儀式空間の整備には、内裏における儀式形態と空間の影響が存在したと考えられ、対の建築的充実も、内裏での儀式の受容による貴族の私的儀式の成立との関係から検討する必要がある。なお、東西対と清涼殿との関連については、既に飯淵康一「空間秩序からみた平安期貴族住宅の研究」(私家版)1985、第 6 章第 2 節、に指摘されている。
- 76) 拙稿「後鳥羽上皇御所二条殿と高陽院の対代について」日本建築学会計画系論文集第 458 号、1994.4、「藤原良経の中御門京極殿の施設構成について」日本建築学会東海支部研究報告集 1995.2 参照
- 77) 両殿の構成については太田氏前掲書を参照。両殿における安鎮法壇所は明らかではないが、移徙時に水花童女が献灯する寝所は別殿舎となろうか。
- 78) 前述したように、賢聖障子がたてられた第 4 期高陽院や第 1 期大炊殿の寝殿も塗籠がなかった可能性がある。第 2 期大炊殿完成移徙時の記事である『中右記』天永 3 年 10 月 19 日条に「午時任勘文令立御帳(南殿御帳ハ是大嘗会悠紀所進也、中殿夜大殿料新造)」とある。御帳は南殿と中殿夜大殿の 2 か所に立てられた。「本被作坐居之家」で「凡人舂」の第 2 期大炊殿の寝殿にも塗籠が存在しなかった可能性がある。また小寝殿が存在した鳥羽南殿寝殿にも塗籠が存在しない。
- 79) 『長秋記』長承 2 年(1133)9 月 8 日条「〔(頭書)大裏宝劔繪緒鼠喰損事]今日民部卿相語、大裏宝劔繪緒爲鼠被喰切云々、此何様可被行哉、御劔必在夜殿御所、主上必寝此所、而此二代捨置夜殿、他所御寝、此故如此事出来也、尚雖不御夜殿、内侍守護可候歟云々、」二代とは鳥羽・崇徳、当時の御所は、内裏に準じた永久度土御門鳥丸殿である。
- 80) 拙稿「小御所について」日本建築学会東海支部研究報告集第 22 号、1991.2 参照
- 81) 鈴木氏前掲書、p238 参照
- 82) 川上貢『日本中世住宅の研究』墨水書房 1967 第 1 編第 6 章参照
- 83) これは太政官庁で行われることとなる即位式の変様と一致した動向といえる。即位式の変様に関しては、拙稿「中世即位式の空間構造」(上野邦一・片木篤編『建築史の想像力』学芸出版社 1996.6 所収)参照。

(2004 年 3 月 26 日原稿受理、2004 年 11 月 2 日採用決定)